

準備五ヶ月 いざ風早へ 幻の九萬山へ

何かの力に導かれるようにして、「瀬戸内しまなみ海道」で「水軍城」に迷い込んだのがきっかけとなって、中世の伊予武士団・河野一族の幹部として「正岡氏」がかなり中枢の地位にあったのを知った。それから、およそ五カ月が経ってしまった。

いま、わたしの手元には「伊予史料集成」一連の古文書集のうち、四冊だけがある。『河野家文書』『善応寺文書』『大山積神社関係文書』『国分寺・保国寺文書』が書棚に並ぶようになった。このシリーズは史料編の前に、景浦勉氏の解説が付いているのが魅力である。ご本人は「この文書に初めて接せられる方への参考に供するためであって、決して学究的なものではない」と、控えめに断っているが、端正な観察、蓄積に満ちた考察、平易だが品格のある文章と、郷土史家としての第一人者の風格と力柄が節々から窺えて、出色の仕事をしている。

できれば、全巻を揃えて行きたい。特に河野氏の動静については、この人のものが煽情的でなく、安心して従って行ける。ただし、段々と大御所化し、後半世の仕事が粗くなって、どれもこれも同じものに見えはしないか、と余計な心配をしてしまうくらい、景浦説が主流となってしまった印象がある。

解説篇での河野氏の興亡については、『善応寺文書』で、河野氏の出自と同氏の鎌倉末期までの動静が、記述されている。以下、

『河野家文書』は、南北朝時代から応仁・文明の乱に至るまでの河野氏の活躍、『大山積神社関係文書』は、戦国時代における河野氏の衰亡、と区分されている。

■手元に置きたい資料リスト

『国分寺・保国寺文書』は、どうしても入手しなかった一冊であった。

もう一つのシリーズに「伊予史談会双書」があり、これはコピーが必要な箇所を入手した。『予章記』を中心にして、これに『水里玄義』『河野分限録』『水里澹洄録』が採録されている垂涎の書である。『水里澹洄録』は史実にいくつかいかなものかと首を傾げる部分あり、といわれてはいるが、正岡氏の発祥から衰亡、それからの消息を伝えた、驚愕の書であった。

『松山藩役録』『伊予の古城跡』も同シリーズに入っていた。これらのすべてを、そっくり手元に置きたいものだが、これも神田の慶文堂に頼ったのでは、何分にも高価すぎる。現地で購入できないものか。それとも、時間をかけて国会図書館通いを続けるしかないか。

それにもまして、ぼくを夢中にさせてくれたのが『風早』に積み重ねられた二〇年に及ぶ郷土史研究家たちの情熱である。幻の「正岡氏考」と諦めていた得居衛氏の著作を捕捉したときのぼく

の到達感は、いまも生々しい。そして、『風早』を舞台に数多くの人々が、自分達を育んでくれた郷土の歴史・文化・社会・先人とじっくり対話しているのを知った。

■筑豊に渡った時代が透けて見える

父の遺した片言隻句をたよりに始めた「血族の郷」探しも、やつと本番に入れそうだ。

五月三〇日には、再び唯一の協力者である従姉の良枝さんから二度目の封書が届いた。「改製原戸籍」である。わが祖父・正岡重吉から家督を相続した順吉伯父の戸籍には、よくもまあ、と呆れるくらい、親族者の名前が連なっていた。最初の「除籍簿」が一三人だったのに較べると、こちらは一九人。亡き兄の昭次まで同じ籍の中に入っていた時代があったのだ。目新しい事実はない。四国から筑豊に流れ着いた一族が肩を寄せ合って生き抜いた大正から昭和への時代が、透けて見える。炭坑の街・直方から、新興の工業地帯・八幡に、順吉兄弟が暮らしの地盤を移し、そしてそれぞれが分家していく。わたしの生まれる前夜、と云うていい時代であった。

良枝さんからはメッセージが添えてあった。

「先日は風早 お送り頂き ありがとうございました 私の名が出ていますのが 一寸気恥ずかしい気分ですが 楽しく拝読いたしております ゼンリン これも 私には懐かしい想い出

となっております 照孝の娘が大学を出て 縁故でしか入社試験を受けること出来なかったときの 経緯 年を重ねるといろいろなこと 思い出します さて早速 二十六日に 直方に膳本取りに行きました 丁度魁皇関の優勝パレード 小さな町の出来事 各社のヘリコプター 窓からは扇風機で紙吹雪 多くの小学生 ほほえましいことです 膳本取りとパレード 幸先の良いこと願って 松山行き お元気でと祈っています」

九〇歳でまだ健在の叔父・安部鶴一（通称・都留一）の住所と電話番号も添えてある。記憶もかなりはっきりしているようだ。風早へ行く前に、話を訊いておいたほうがいいだろう。気がかりになったら、すぐに手を打っておく。これが定石だった。

新しい改製原戸籍謄本の到着に励まされて、久しぶりに国会図書館へ赴いた。

「愛媛県史」の「人物篇」に狙いを定めていたが、これといった収穫はない。それでは、と「近代」の「上・下」から「県政」の項を洗う。明治七年一月に、岩村高俊が権令として任命された。江藤新平の佐賀の乱を鎮圧した岩村は大久保利道のお気に入りだった。三〇歳の若い地方長官の赴任。それから五年半の施政は「岩村県政」と呼ばれたほど、個性的で独自性を持っていて、県政創始の功績者として評価が高かった。積極的に愛媛県の士族を登用したのもよかった。新しい権令の最初の大きな施策は、町村

議事会の開設であったという。特に郡政の振興に力を入れた。正岡慶三はこうした時代より、少し遅れて地方行政に起用され、明治四三年当時には、明神村々長に選ばれている。しかし、県会議員になつたはずなのに、その確認が、何故か取れないままだった。

それはさておき、岩村権令は明治九年、官選戸長が転免死亡したときの後任戸長は公選させることにした。やがて岩村は県令に昇進し、縦横に手腕を発揮して、明治一二年三月で転任していく。県議会は地方行政を推進していく時代から、大正デモクラシーの政党活動の渦中に、すっぱり飲み込まれる。政友会・立憲同志会の二大政党の対決は県議会議員選挙でヒートしていく。第十七回選挙（大正四年九月）の上浮穴郡の選出議員は、政友会の正岡慶三、とあった。きつちり四年間、議員を務め上げたのか。具体的な活動ぶりは、何一つ、見えて来ない。多分、次の選挙にも立候補しただろうが、もう名前は出て来ない。挫折した地方政治家の、お決まりの末路を、この人も演じたというのか。

すでにその頃には、養家から分かれた重吉一家は、筑豊地帯で生き抜くための日々を送っている。もうすっかりお互いの行き来はなくなっていたのだろうか。その辺を、どうやって調べるか。

日程表も出来た。こんなものでいいのかな。

『新・正岡氏考』取材日程表

6月5日(月) 07:25 ANA583/羽田発

08:40 松山着 予約番号116

●レンタカー受取り/トヨタレンタリース愛媛・松山空港営業所
6月10日返し 089・972・610

0 ●北条市役所・戸籍課/伊東さん 0899・93・1111

田中嘉蔵/渡部長五郎戸籍

●久保・河原・福角を歩く、訪ねる。

●久万町役所 正岡慶三・周平戸籍

西明神を歩く、訪ねる

●福角の高橋・乗松家を訪ね、正岡家との関わりを調べる。

●宿泊/門田旅館 (素泊り4000円)

6月6日(火) 09:30

●竹田覚氏・玉井利明氏/風早歴史文化研究会 089・993

3266

『北条市誌』『久万山町誌』入手、あるいは複写依頼。

長野光雄氏とのコンタクト可能か。得居衛氏の墓を詣でる。(献

花)

「久万山系正岡氏」と特定できる背景について見解を。

【補強取材】高縄神社・善応寺・宗昌寺・八反地周辺(正岡郷)

●道後鉄道専務・村越(一説には正岡姓) 正敬について。

● 門田旅館泊 夜、竹田・玉井両氏を食事に招待する。
● 「ケン・マツウラ・レーシング」の光と影／小説化の時の潤滑油として

6月7日(水)

● 県道湯山北条線を玉川町へ走る 竜岡「幸門城趾」へ。
『正岡氏』にまつわる史実集め。最後の貴公子・河野通勝のこと。
● 鈍川温泉『美賀登』泊 089・977・0460

6月8日(木)

● 面河側から久萬山へ入る
久萬山系正岡氏の取材／久萬町図書館／明神村／大除城趾／慶三氏の業績追跡(村長・県会議員・米相場・重吉一家との関係・周平氏一族の今)
● 奥道後カンポ寿楽荘 089・977・0460

6月9日(金)

● 予備日
● 宿泊先未定／空港の近くか、堀江権現温泉

● 6月10日(土) レンタカー返却

11;20 ANA444／松山発 大阪着12;20
京都センチュリーホテル 15;00

● 中学同窓出席 終了後、急ぎ新幹線にて帰京。



風早郷の中心・河野地区宮内から雌甲・雄甲の二山と高縄を遠望

「正岡姓MAP」久萬山&玉川地区版

二晩かがりて『正岡姓MAP』つくり熱中してしまった。例の「ゼンリン住宅図」で、北条市のもを作ってみた時の発見の多さに、我ながら驚いたものだ。同姓のかたまり具合を町や村の佇いと重ね合わせられるのだ。久保と河原地区に「渡部」と「田中」の両姓が蝟集していたり、なるほど、と妙に納得したものだ。

■まだ見ぬ明神の佇まいが浮かび上がってくる

やっと狙いが上浮穴郡「久万町」と越智郡南部「玉川町」に絞られたので、正岡姓の分布を実際にMAP化しようと、思い付いた。コピーしたばかりの白紙のものを繋ぎ合わせる。次に「正岡姓」を発見したら、ピンクの蛍光ペンで塗り潰して行くのだ。出来上がってみて、ピンとくるものがある。

まず、本命中の本命、西明神と東明神である。松山方向から南へ走る。砥部を過ぎ、三坂峠を越えようと、三三号線と久万川が、絡んだり、離れたたり、戯れている。川の東側が「東明神」。当然、西に「西明神」。田圃の中のもっとも佳い場所に、一塊りになって四、五軒が肩を寄せ合っているのを発見。集落の傍を久万川の枝川が走っている。皿木川である。部落の小字は「高山」。六軒の「正岡姓」。一番敷地の広いのが「昭」家。手元の資料と引合

せる。ここは、まだ東明神だった。

「賢一」「安則」「伊佐美」「千年」「サカエ」と繋がる。東明神でひたすら農業に専念することを家訓とし「助太郎」から「玉位」へ、そして「昭」へと家長の座をバトンタッチしてきたあの堅実一筋の一族である。多分、西の周平・慶三一家とは強烈なライバル関係が続いていただろう。

田圃の中を走って、一旦、幹線道路・三三号線へ出る。「高山寺」はこの地区でただ一つのお寺らしい。ほかに卍印は見当たらない。鳥居のマークは「河内」と「秋葉」の二つの村社。「秋葉」の神主が「敏樹」。久万川は、このあたりから蛇行を始める。東西から低い山塊が押し出して、この村を挟みつけにしているためらしい。「大除城趾」は「久万カントリー」の奥のあたりか。「明神公民館」の手前を右折すると、いよいよ西明神地区である。

「島田橋」を渡る。木造りだと、車では渡れないかもしれない。突き当たりが「北条(きたじょう)」と呼ばれる地区。因縁めいた名前の部落である。やっぱり六軒が集まっていた。「篇(あつむ、と訓むのかな)」だけが一呼吸置く感じで孤立し、あとは「武」「等」「哲男」「スエ」「ヨシミ」が円陣を組んでいる。どうやら、この「正岡氏」は「慶三」グループではないようだ。

久万川に並行して南へ進む。「大野」「小倉」「小倉」「山岡」「和田」「小倉」「露口」の苗字が道の両側に散在したところで、「敏

船山、笠松といった山城の向こうが皿ヶ峰 西明神はこんな村



樹」「富良」の二軒。この「敏樹」は秋葉神社の神主さんと同名だ。「風呂川橋」を渡る。橋の名前が、この久万川の枝川らしい小さな流れを「風呂川」だと教えてくれる。

「栄谷（のうたに）」という地区に入った。「うん？」先の電話番号調べで、昭和九年当時の村長「公平」一家は村を出て、「栄谷」に転出したと推理したのは大変な誤解だったことになる。日の一番当たる特別の場所ということでも名付けられたのである。「西明神」の中心にいるということなのか。公平氏の跡取り「侶則（ともりのり、と訓む）」は、ちゃんと「西明神」にいた。「健司」「松尾」に「清喜」を従えて。地番は「五七一」。戸籍調べでこの地番が出てきたら、間違いなく、ここが「正岡周平」の本拠だったことになるのだが……。

従姉の良枝さんが、つい先日の電話で追想してくれた言葉が効いてきた。

「だんだんと思いついてきたのよ。小学生のころ、父（順吉）に手を引かれて小倉から船に乗って松山へ行ったという記憶だけはあるの。昭和八年か九年ね。田圃の中の大きなお家で、前を川が流れていたのよね」

久保も河原も、近くを粟井川は流れているが、少女の目に「川が流れていた」と映るほどの距離関係ではない。やっぱり、何かの挨拶で西明神まで、足を運んだと推論してもおかしくない。

真向かいに「金刀比羅神社」が鎮座する小高い丘。その登り口に「宗三」「建美」「定」「高好」「ヒロミ」。少し間を置いて「ヤ

エ子」「喬」。高殿という地区に入る。三三号線に戻る形になっていた。「史跡仰西渠」がこの辺では有名らしい。「俊彦」「義盛」の二人を加えると、西明神のMAP作りは完了である。

こうやって、イメージの世界でも「父祖の村」を訪れてみて、はつきりしてくるものがある。それは「正岡重吉・クラ」の夫婦は、なんらかの事情で養子として「久万山系・正岡家」に加わったにすぎない、という推察は的を射ているに違いない、という確信である。大地に根を生やして「血脈」を保ってきた一族の人にとって、重吉夫妻は突然に「雨宿り」で飛び込んで来た闖入者であった怖れもある。それほどに、影の薄い存在だと気づいてしまう。その点、河原の「渡部家」の線は、血の濃さを感じ取ってしまうから、不思議である。

玉川町」篇は、幸門城主としての「正岡氏」の色の濃さが強く残っているのが、特徴だろう。竜門下、鍋地、鬼原、元の久和村。ピンクの蛍光ペンで塗り潰す回数が増えると、不思議に嬉しくなってしまう。鴨部あたりにも結構、「正岡姓」が蝟集していた。

もうすぐ、風早の郷に入る。竹田覚館長とは六日の夜、一緒に食事をする約束も出来た。玉井利明氏も同席できるよう、誘ってみるという。長野光雄氏にも電話を入れた。かなり高齢になられた様子で、それでも立ち寄ってくれ、とのお返事だった。いざ、風早郷へ。そして幻の九萬山郷へ。

(第2部 完)



大正デモクラシーの時代、美しい松並木に縁取られた今治街道